

教員の資質能力向上に係わる特配（C T 特配）活用推進事業 報告書

大泉町立東小学校

1 研修主題

C T を中心としたメンター研修による資質能力の向上を目指して

2 研修のねらい

- ・相談ができる場の設定により互いに職員が抱えている悩みや不安の解消を図る。
- ・お互いの課題を共有し、助言しあうことで、学び合い、学級経営や授業に生かせるようにする。
- ・日常の教育活動の中で接点の少ない異なる学年ブロックの職員と関わることで、互いのことを知り、人間関係を深める。
- ・教員経験の長短に関わりなく、教員の持つよさを互いに共有し、指導力の向上につなげる。

3 研修の方法

- ・運営委員会の実施日に、月1回を目安として定期的に実施する。
- ・運営委員を除く教諭で実施する。
- ・1回の研修を30分程度にし、教員が負担感を持たないように工夫する。
- ・各自の困りごとを課題の中心とし必要感のある研修を行う。
- ・メンターとなる教員については「東小人材バンク」を活用し、メンター（講師）となる教員を選定する。
- ・職員全体で研修内容が共有できるように、「資質向上研修」の中に位置付け、組み入れる。
- ・チームリーダー（関根、岡田、藤田）を中心として進めるが、メンター（講師）は研修内容に応じて臨機応変に変えていく。
- ・中堅教員のよさが生かせるように、意図的に話題の中心となれるように内容を設定していく。

4 研修の内容（メンター研修の実施内容）

（1）日程とテーマ、講師

- ① 4/15（月）「自己紹介・新年度が始まって2週間が過ぎて」
：メンター（関根正和 教諭、岡田深雪 教諭、藤田朋美 教諭）
- ② 5/13（月）「新年度が始まり1ヶ月が過ぎての感想、課題」
：メンター（関根正和 教諭、岡田深雪 教諭、藤田朋美 教諭）
- ③ 6/10（月）「ラグビーボールを使ったエクササイズ」：メンター（関根正和 教諭）
- ④ 8/21（水）「熱中症の予防」：メンター（荻原史帆 養護教諭）
- ⑤ 9/12（木）「ICT機器の活用について」：メンター（所 弘典 教諭）
- ⑥ 10/10（木）「効率のよい仕事の仕方、時間の使い方について」
：メンター（小倉勝利 教諭、荒井郁代 教諭、小田木祐子 教諭）
- ⑦ 11/18（月）「個に応じた支援の仕方（特別支援教育に目を向けて）」
：メンター（小倉勝利 教諭、小田木祐子 教諭）
- ⑧ 12/9（月）「身体を動かそう」：メンター（田口泰久 教諭）
- ⑨ 1/16（木）「日本語教育について」：メンター（森 淳子 教諭）
- ⑩ 2/17（月）「これまでのメンター研修を振り返って」：メンター（関根正和 教諭）

（2）メンター研修の実践例

- ① テーマ「自己紹介・新年度が始まって2週間が過ぎて」 実施日：平成31年4月15日（月）
新年度スタートということもあり、お互いのことを少しでも知りましょうということをメインにしてアイスブレイクから進めた。「前任校との違いに悩んでいる」という声が多かった。どのグループも違いを知りたいという意見が目立った。継続して本校に勤務する職員には、当たり前になってしまっているのかもしれないとの意見も出された。具体的な場面で知りたいことについての質問が出たので、その都度各学級の様子を説明するようにした。また、今後のメンター研修で取り上げてもらいたいことも挙げてもらった。振り返りの場面で「授業中での具体的な支援の様子を見てみたくなった。」「学力差が大きい。」「外国籍の児童との関わらせ方に悩んでいる。」などの悩みを共有するとともに共通の「課題」を明確にすることができた。
- ② テーマ「ラグビーボールを使ったエクササイズ」 実施日：令和元年6月10日（月）
大泉町では5年生の体育の授業でタグラグビーを取り入れていること、人権講話でラグビーに携わる方をゲストティーチャーに招いた授業を行っていることから、ラグビーボールを使っのエクササイズを紹介した。これまでに、トップリーグのラグビー選手との授業を実践してきた経験から、小学生にあったトレーニングメニューを考え、取り入れてきた。単純な動きではあるが、難易の幅があり、タグラグビーの授業の導入や普段の体育で子どもたちも意欲的に取り組むことができるエクササイズで、体力作りに生かせるものを紹介した。また、日本で行われるワールド

カップについての紹介もした。振り返りの場面で「イメージとは違って難しかった。」「ゲームまで進めると、別の種目では目立たない児童が活躍できる。」「単純なタスクではあるが、運動量もあり、体力作りになる。」など今後の授業等で生かして取り入れていこうとする発言が見られた。



③テーマ「熱中症の予防」 実施日：令和元年8月21日（水）

2学期に実施する大きな行事である運動会に向けて、児童の健康、安全の確保を目指して、「熱中症」の原因と予防、もしもの時の対処の仕方について、実技を含めた研修を行った。全校児童に関わるということもあり、職員全体で研修を実施した。養護教諭による熱中症についての説明に始まり、具体的場面を設定し、実演を交え、具体的な対処の方法を研修した。実例を挙げて、どのように対処したかの説明もあった。振り返りの場面では、「教諭と児童では耐性が違う。」「身近に起こりうることを自覚ができた。」「起こってからではなく、未然に防ぐための指導が大切であることが分かった。」など、教員の熱中症についての実践的な理解を深めるとともに危機管理の意識の高揚につながる研修となった。



④テーマ「日本語教育について」 実施日：令和2年1月16日

日本語学級を担当している教諭に、具体例を挙げてもらいながら、日本語学級で実際に指導をしていることや困っていることを話してもらい、日本語学級での指導や学習内容への理解を深める機会となった。「個別の指導の記録（母語、日本語での学習、指導内容など）」を引き継げるように記録し、それをもとに指導していることや「対話型アセスメント（DLA）」を活用した学習支援について説明してもらった。また、児童の実態から、母語の語彙力が少ないため日本語が覚えられないこと、漢字は読めても意味が分からないこと、音と形、文字の認識が結びつかないことが多く、言葉、文字、絵をセットで覚えられるようにしていること、「サバイバル日本語（生活上、最低限必要な日本語）」を身に付けられるように指導していることなど日本語学級の苦労や指導の工夫について共有した。また、「JSLカリキュラム」の考え方に基つきリライト教材を活用していること、場面と関連付けて具体例で定着を図ること、日本語を使う環境作りをしていることなど親学級でも指導できることについても共通理解が図れた。振り返りの場面では、「子どもが、教室と日本語学級とでの様子、態度の違いが大きいことが分かった。」「指導、関わり方については、もっと理解し、連携することが必要である。」などの声が聞かれた。

5 成果と課題

(1) 成果

- 普段なかなか関わりの少ない異学年ブロックの先生方の実践や考えを知ることができ、今後の実践に生かすことができる研修となったという教員が多かった。
- メンターとなって研修を進めることで、どんな言葉を選べば相手に思いや考えが伝わるのかを自分自身で振り返る機会となった。
- メンターとメンティの双方の立場を経験した教員の要望を聞くことで、学びたいと思っているテーマを決めることができ、必要感のある研修を進められた。
- 先輩方の実践を知り、自分の学級経営に生かし、「まずはやってみよう」と意欲を高めることができた教員が多かった。
- 本校の今後の課題でもある「英語指導のポイント」や「器械運動のポイント」（補助なしでもけがをしない場の作り方）、「ICT機器の活用」などについて、本校の教員の特技を生かした研修を行っていきたいという意見があがった。

(2) 課題

- 運営委員以外の教員にとっては充実した研修となるが、より実践経験をもつベテラン教員からの伝達や参加の場もほしいところである。
- 放課後の研修になってしまうため、児童を相手にしているときの様子が見られないことが課題である。相互参観授業などの場を計画的に設定できると、研修したことが、今後の授業に、より反映することができる。
- メンターとなる教員が主体的に準備をしてくれたので充実した時間となったが、その立場となって研修することに遠慮がちになってしまう教員も見られる。